

目標を表す「ねらう」「めざす」について

小林 可奈子

1. はじめに

われわれが行動する過程において極めて重要な概念の一つに「目標」が挙げられる。しかしそれを言語研究の対象として精密に記述するのは容易なことではない。というのも、何かを目標に据えるということは、精神的行為であり、従って具体性が低いからである。ここで取り扱う動詞「ねらう」「めざす」が目標を表す動詞であることには異論はないと思われる。しかし動詞そのものだけを対象にしても、どのような目標を立てるのか、どのように目標にするのかといった具体的なことは見えてこない。

(1) 信長が 敵陣を ねらう。

(2) 市長が 東京を めざす。

(1)(2)では各語の言い切り形だけが用いられている。(1)は文法的に全く適格な文である。しかし主体である「信長」が具体的にどう行動するかということはこの文からはわからない。(2)も「『東京』という地点を目標として移動する」や「『東京』を何かの規範にする」など複数の解釈が可能である。そこで「ねらう」「めざす」をテ形にして後ろにワンフリーズ付加すると、(1)(2)は状況がより詳しくなり、意味も限定される。

(3) 信長が 敵陣ねらって 突進する。

(4) 市長が 東京めざして 車をとばす。

本稿ではテ形の後に続く動作を「後続行為」と呼ぶ。実際「ねらう」「めざす」の用例を観察すると(3)(4)のような文が多いことに気がつく。具体性の低い行為を表す動詞を分析する場合、このようにより具体的な行為を手掛かりにするのが一つの有効な手段であると考えられる。以上の理由により、本稿の例文には適宜テ形を用いてある。多くの用例を観察することによって両動詞の意味特徴を抽出するのが本稿の目的である。

ただしテ形と一口にいてもその性質はさまざまである。意味に関していえば単純接続、理由、逆接などにわたっているし、テ節が主節に対してどの程度自立性を保っているかも例により異なる。実は目標を表す動詞のあるものは動詞としての自立性を失って形式化しており、後続行為への従属度が高い。^{注1)}本稿では両動詞の自立性がどれくらい保たれているかについても触れたいと思う。特に「ねらう」の方はその点が意味にも関わってきて興味深いものがある。

2. 分析

「ねらう」「めざす」が用いられる構文は次の通りである。

N_1 が N_2 ヲ V (／Vテ～する)。

N_1 に立つ名詞句を「主体」、 N_2 に立つ名詞句を「目標」と呼ぶことにする。テ形が用いられた場合、「ねらう」「めざす」の主体と後続行為の主体とは一致する。

分析の手順としてまず形態的に明らかである主体と目標に関する制約について述べる。それから文の直接の構成要素には現れていないその他の特徴を抽出し、それをできるだけ多くの方法で検証していく。

尚、分析の必要に応じて両語の例文は並べて出したり別個に出したりしている。

2.1. 主体

まず「ねらう」「めざす」の主体に関する制約について調べる。

- (5) 信長が 敵陣ねらって 突進する。
- (6) 信長が 敵陣めざして 突進する。
- (7) 綾子が 優勝ねらって 参加する。
- (8) 綾子が 優勝めざして 参加する。
- (9) ライオンが 羊を ねらって 近づく。
- (10) サケが 生まれた川を めざして 泳いでいく。
- (11)^{??} 弾丸が 的を ねらって 飛んでいく。
- (12)^{??} 弾丸が 的を めざして 飛んでいく。
- (13)^{??} ボールが ゴールを ねらって 飛んでいく。
- (14)^{??} ボールが ゴールを めざして 飛んでいく。

例文に見る通り「ねらう」の主体は有情物でなくてはならない。また「めざす」の場合は(12)(14)のように主体が無生物であっても不自然ではないが、そこには「弾丸」「ボール」に対する擬人化が働いていると考える。本稿では主体を人間（または人間に準ずるもの）に限定して論を進める。

2.2. 目標

「ねらう」も「めざす」も他動詞であるから、必ずヲ格つまり目標を要求する。従ってどのような名詞が目標になりうるかという点から検討していく。目標となる名詞は大きくモノとコトに分けられる。全ての名詞がモノかコトのいずれかに分類されるというわけではなくどちらともいいがたいような名詞もある。だが、たとえば「投手が

ボールを投げる」における「ボール」は確実にモノとして分類されるだろうし、「連勝のカギは投手にあった」における「連勝」はコトに分類されるだろう。本稿でもある程度有効であると思われるため、この二分類を取り入れている。説明の便宜上「ねらう」はモノとコトを本節と次節に分けて扱い、「めざす」は本節で同時に扱っている。先に「めざす」の分析から入る。

2.2.1. めざす

目標という概念が最も典型的に現れるのは移動を表す文においてである。そして移動の様態を示すのが後続行為である。移動は物体の位置の物理的変化であるから比較的分析がしやすい。

- (15) 東京を めざして 車をとばす。
- (16) 自由の国めざして 亡命する。
- (17) 敵陣めざして 突進する。
- (18)[×] 東京を めざして 電車に乗る。
- (19)[×] 太郎を めざして 手を振る。
- (20)[×] 敵陣めざして 合図をする。

(15)~(17)のように後続行為が移動を表している文は適格である。ところが(18)~(20)のように後続行為が移動を表さない場合は非文になる。このことによって「めざす」は必ず移動を前提にして用いられるのではないかという仮説が立てられる。そう考えて目標をもう一度みていくと「めざす」の目標はみな「場所」としてとらえることができるのである。以下にこの性質を「場所性」と呼ぶことにする。^{注2)}「東京」といった地名はもちろん「自由の国」「敵陣」などの名詞も「場所性」を備えていることになる。しかし明らかに「場所」らしい名詞だけが「場所性」を持つわけではない。

- (21) ゴールを めざして 走る。
- (22) 太郎を めざして 走る。
- (23)[×] 太郎を めざして 追い掛ける。

(21)の「ゴール」や(22)の「太郎」も、文脈に支えられてではあるが「場所性」を獲得している。それぞれ「ゴールのあるところ」「太郎のいるところ」のように置き換えることができる。ところで(23)も後続行為で移動が表されているにも拘らず不適格である。「追い掛ける」ということは目標である「太郎」が一定の位置にいるのではなく「太郎」もまた移動していることを示している。つまり「めざす」が要求する「場所性」とは可動的なものではなく一定の場所でなくてはならない。

一方、コトが目標である場合は物理的な移動が行われるわけではない。

- (24) 太郎は 金メダルを めざす。
- (25) 花子は 大学合格を めざす。
- (26) 花子は 3キロの減量を めざす。
- (27) 市民は 駅の美化を めざす。

しかしモノが目標である場合に準じてみるのが可能なのではないだろうか。すなわち「金メダル獲得」「大学合格」などの目標を据えた抽象的な移動が想定されていると考えられる。その場合「移動」という語よりも「目標の達成」という語を用いた方が現実の用法をよく表せるだろう。

2.2.2. ねらう

「ねらう」の目標の制約は「めざす」よりずっと緩い。

- (28) 暗殺者が 首相を ねらう。
- (29) ライオンが 羊を ねらう。
- (30) 敵陣ねらって 突進する。
- (31) 怪盗が ルノワールの絵を ねらう。

目標が生物であろうと、物質であろうと「ねらう」は広く用いることができるようである。上の例文のように「目標」が「場所性」を持たない「非場所名詞」だと「ねらう」は目標への働きかけを含意する。つまり、主体が目標に何らかの意味において影響を及ぼすことを表す。逆に目標が「場所名詞」である場合、意味にある特徴が出てくる。

- (32) コートのぎりぎりのところを ねらって スマッシュする。
- (33) もっと 右を ねらって 撃つ。
- (34) 人目の多いところを ねらって ポスターを 貼る。
- (35) 獲物のいそうなところを ねらって 罠をしかける。

目標が「場所名詞」である場合は、後続動作の影響を受けるのは目標ではないのである。たとえば(32)の「スマッシュする」の影響を受けるのは「コートの部分」ではなくて「対戦相手」というべきだろうし、(34)の「ポスターを貼る」ことによって影響を受けるのは「人目の多いところ」というよりは「ポスターを見る人々」だと考えられる。影響を受けるためには物質として存在していなければならないから、それは当然のことといえるだろう。

「場所性」に並行するものとして「時間性」という意味特徴が想定できる。たとえ

ば「水曜日」「秋」のように名詞が時間性を帯びているものもあるし、「～のとき」「～のころ」などの語をつけて「時間性」を表すものもある。

(36) チャンスを ねらって 花子のグラスを取り替える。^{注3)}

(37)× チャンスを めざして 花子のグラスを取り替える。

(38) 夜中を ねらって 空き巣に入る。

(39)× 夜中を めざして 空き巣に入る。

(40) 花子の居ない時を ねらって 太郎に電話する。

(41)× 花子の居ない時を めざして 太郎に電話する。

(42) 決定的瞬間を ねらって シャッターを切る。

(43)× 決定的瞬間を めざして シャッターを切る。

「ねらう」は「時間性を」表す名詞（「時間名詞」と呼ぶことにする）を目標にとることができる。「めざす」にはそれは許容されない。^{注4)}

「時間名詞」を目標にとる「ねらう」の例文を、先に出した「場所名詞」の「ねらう」の例文と比べると、両者には通じる点があるのに気がつく。場所という概念は二次元（三次元）の、時間という概念は時間軸の、連続する広がりを持っており、特定の「時間名詞」「場所名詞」を付加することはその中から一地点を選びとることなのである。たとえば「人目の多いところ」といえば全ての空間の中から該当部分だけを選んで選んでいるわけだし、「花子の居ない時」といえばやはり全ての時間の中から該当部分だけを選んで選んでいるわけである。^{注5)}このように「ねらう」にとって「全体の中からある部分に限定してそれを働きかける対象として取り出す」という特徴（以下「限定性」と呼ぶ。）は非常に重要である。逆にいうと、この特徴を備えている名詞ならば「場所性」や「時間性」などに関係なく「ねらう」の目標になることができる。

(44) 高めの直球を ねらう。

(45) ヤングを ねらって 新製品を売り出す。

(44)ではやはり「選択」が行われているのだが、選択肢が同時に主体の前にそろっているわけではない。主体はその選択肢に時間の流れに従って一個ずつ接するのである。この意味で「時間性」と僅かながら通じるといえよう。(45)では特に「場所性」も「時間性」も想定できない。消費者の中から「ヤング」という条件にあてはまる要素を選ぶわけである。ここでも、全体の中から一部分が選択され、限定が行われている。これについては次節で更に詳しく分析する。

2.3. 「ねらう」の「加害性」と「限定性」

「ねらう」は主体が目標に好ましくない影響を与える場合に多く用いられる。この特徴を「加害性」と呼ぶことにする。

(46) ひったくりが 太郎を ねらって 近づく。

(47) 誘拐魔は 花子を ねらって 話しかけた。

(48) 太郎は 花子を ねらって 水を浴びせた。

ここで挙げた「加害性」と前節で挙げた「限定性」とは「ねらう」の大きな特徴であるが両者は独立して無関係に存在するのではない。また「ねらう」は常に両者に伴われるわけでもない。以下ではこの二者の関係を示していく。

前節で限定した「限定性」の定義を繰り返すと「全体の中からある部分に限定してそれを働きかける対象として取り出す」となるのだが、このままでは定義がやや大まかすぎる。本稿でいう「限定性」とはもう少し狭い特徴であったたとえば次のような例文にはあてはまらない。

(49) 信長が 敵陣ねらって 突進する。

(50) 暗殺者が 首相を ねらう。

(51) 親戚が 遺産を ねらう。

ここで「限定性」についてももう少し掘り下げてみる。

(52) ひったくりが 太郎を ねらう。

(53) ヤングを ねらって 新製品を売り出す。

(52)では「ひったくり」が群衆の中から「太郎」を働きかける対象として選ぶということが行われているし、(53)では「製品を売る」ということが重要なのであって誰に売るかということとはあまり問題ではないのだが「ヤング」に目標を絞っている。つまりその選択は恣意的なものではなく、ある一定の条件を満たしていれば「限定性」の対象となる。「場所名詞」や「時間名詞」の例文ではこの点が一層顕著になる。

(54) 人目の多そうなところを ねらって ポスターを貼る。

(55) チャンスを ねらって 花子のグラスを取り替える。

(54)(55)とも一定の条件があるものの目標は不特定であるといえよう。「ねらう」の持つ「限定性」はより厳密にいうと「全体の中からある条件を満たす不特定の部分に限定して」ということなのである。このように考えれば(49)～(51)には「限定性」がないのは明らかである。目標はそれぞれ「敵陣」「首相」「遺産」など特定のものでなければならぬからである。しかしその一方で次のこともいえる。「限定性」が見出せない用例、たとえば(49)～(51)には「加害性」が顕著なのである。また「加害性」も「ねらう」

の全ての用例に見出せるわけではない。

(56) 的を ねらって 引き金を 引く。

(57) ヤングを ねらって 新製品を 売り出す。

(58) 決定的瞬間を ねらって シャッターを切る。

(56)~(58)には特に「加害性」は存在しない。その代わり「限定性」ははっきりと現れている。以上のことから考えると「加害性」と「限定性」は相補う形で「ねらう」を特徴づけているといえよう。

さて今までの例の多くは「敵陣に突進する」「人目の多そうなところにポスターを貼る」「満開の頃に花見に行く」のように目的を二格でマークすることができる。目標が後続行為の動詞の必須成分とはいわないまでも、それと強く結びついているからである。言い換えれば、目標が動詞に強く依存しており、自立性が低い。

(59) ヤングを ねらって 新製品を売り出す。

(60) 親戚が 遺産を ねらって 遺言状を改ざんする。

ところが上の例の「ヤング」や「遺産」を二格の名詞句に置き換えるのは難しい。「新製品を売り出す」ことは「ヤング」を、また「遺言状を改ざんする」ことは「遺産」を直接要求するわけではないのである。これらの例の「ねらって」は比較的自立性が高く、等位接続に近くなる。この場合「ねらって」は単文で用いられたときと同じような環境を持つようになる。

このことをコトを目標にとる「ねらう」の例文で確認してみることにする。

(61) a 太郎は 金メダルを ねらう。

b 太郎は 金メダルを ねらって 練習を重ねる。

(62) a 花子は 大学合格を ねらう。

b 花子は 大学合格を ねらって 勉強する。

(63) a ? 花子は 3キロの減量を ねらう。

b 花子は 3キロの減量をねらって ダイエットする。

(64) a ? 市民は 駅の美化を ねらう。

b 市民は 駅の美化を ねらって キャンペーンを行う。

上の例のbはやはり後続行為への「ねらって」の従属度が低く、二つの独立した事象が並んでいるようである。「ねらって」がより後続行為に従属している用例では、実質的な意味を担っているのは後続行為の動詞だけであって、「ねらって」自体にはあまり実質性がない。ここでいう実質性を厳密に規定するのは難しいのであるが、ともかく同じく実質性を失ったものとして似たような例を挙げると、「関して」「基づい

て」「連れて」などである。

(65) その噂は 故人に かんしている。

(66)[?] その噂は 故人に かんする。

(67) この芝居は 事実にもとづいて つくられた。

(68)[?] この芝居は 事実にもとづく。

(69) 彼女は 娘をつれて 再婚した。

(70)[×] 彼女は再婚の時 娘をつれた。

これらの語は言い切り形よりもテ形として熟しており、程度差はあれ形式化している。それに比べるとコトを目標にとる「ねらう」は単なる実質的・抽象的移動の終着点を示すだけではなく、もっと能動的な意味を持っている。その意味を抽出すると「獲得」「達成」ということになるだろう。モノを目標にとる場合は「獲得」、コトを目標にとる場合は「達成」という意味を「ねらう」の中心的特徴とするわけにはいかないかもしれないが、「めざす」と比べたとき「ねらう」はこうした実質的意味を、文脈に助けられてとはいえ、帯びやすいといえよう。

ところで(63)(64)のaはやや落ち着かない印象を受ける。しかし、bのように後続行為で、あるいはcのように手段を表すテ格でもってどのように「ねらう」のかが明らかにされていればかなり自然な文になる。

(63)c 花子は ダイエットで 3キロの減量を ねらう。

(64)c 市民は キャンペーンで 駅の美化を ねらう。

この現象はどう説明したらよいだろうか。ここで参考にしたいのが工藤1982で提案されている「やきつけられ度」という概念である。

「ねらう」にとって最も典型的な用例が「暗殺者が 首相を ねらう」「ライオンが 羊を ねらう」など文脈自体に「加害性」の強いものであるので、それが繰り返し使用されているうちに、そうした文脈なしでも「ねらう」から「加害性」が喚起されるようになった。その結果「太郎が 花子を ねらう」といった中立的な文脈において用いられても「加害性」は見出せる。ただしこの「加害性」は先にも述べたように、それを緩和するような他の情報を加えてやれば払拭される。(63)(64)のbがaに比べて許容度が高くなるのはその一例であろう。

2.4. 受動態

前節までの分析で述べた「加害性」と「限定性」について、ここでは異なる角度から確かめたい。そのための統語的手段として受動化を取り上げる。受動化には動作主

と動作を受ける対象とが意味的にどのように関連しているかが反映されるのである。

(71) 太郎が ひったくり に ねらわれる。

(72) 首相が 暗殺者 に ねらわれる。

(73) 羊が ライオン に ねらわれる。

(74) 遺産が 親戚 に ねらわれる。

これらは全て適格な受け身文である。どの例にも「加害性」が見出される。

(75) スマッシュは どの辺に 打たれましたか。

—— コートのぎりぎりのところが ねらわれました。(観客、つまり選手以外の第三者の発話とする。) [32]

(76) ポスターは どこに 貼られますか。

—— 人目の多いところが ねらわれます。 [34]

(77) インタビューは だれに 行われるでしょうか。

—— 目立つ人が ねらわれるでしょう。

(78) いつ 電話が かかってきましたか。

—— 花子の居ない時が ねらわれました。 [40]

(79) いつ シャッターは 切られますか。

—— 決定的瞬間が ねらわれます。 [42]

(75)～(79)では目標(受動文ではガ格に立つ)に対する「加害性」はとりたてて感じられない。むしろ、「限定性」が認められるといえよう。もっとも(75)～(79)は全て目標が場所名詞か時間名詞であって有情物ではないので「加害性」が生じにくいということがある。その他に「加害性」を排除している要因の一つとして、質問文という文脈の支えが挙げられよう。これらの質問文では、能動文の後続動作だったものが表されている。対応する能動文(〔 〕で示されている)を見ると明らかである。もし質問文がなく受け身文だけであるならば、目標がどのような行為の目標とされているのかという情報がなくなることになる。その場合は受け身文に(目標自体でなくても誰か関係者に対する)「加害性」が認められる。従って「ねらう」から「加害性」を排除し、「限定性」を読み取るためには、後続行為などによって状況が説明されていなければならない。ここでも、「ねらう」を単独に用いると、やきつけられた「加害性」が現れることが確かめられる。

次に「めざす」の例文を受動化してみよう。2. 2の分析で「めざす」の目標は場所名詞でなければならないことがわかっている。

(80)^x ゴールが 太郎によって めざされる。

(81)[×] ドライブで 空港が めざされる。

(82)[×] 自由の国が その亡命者によって めざされる。

(83)[×] 北が めざされる。

「めざす」の例文を受動化すると不自然になる。受け身とは行為者の動作・作用を受ける対象側からの叙述である。(80)~(83)が非文であるということは「めざす」の目標が作用を及ぼす対象ではなく単なる到着点にすぎないことを示しているといえよう。

コトを目標にとる場合はまた事情が異なってくる。「めざす」の受け身文は適格に「ねらう」の受け身文は不適格になる。

(84)[×] 金メダル獲得が ねらわれている。

(85) 金メダル獲得が めざされている。

(86)[×] 彼らの間では 大学合格が ねらわれている。

(87) 彼らの間では 大学合格が めざされている。

(88)[×] ヨーロッパ統合が ねらわれている。

(89) ヨーロッパ統合が めざされている。

(90)[×] 今我が社では 合理化が ねらわれている。

(91) 今我が社では 合理化が めざされている。

非文になっている(84)(86)(88)(90)を観察すると、「加害性」が文を不自然にしているらしいことに気がつく。コトを目標にする「ねらわれる」が不自然であることについては本節の最後でもう一度触れる。

一方「めざされている」という受け身形は確かに自然なのであるが、例文をよくみると「めざし」ている主体は誰か特定の人物ではなく、不特定多数の人間であることがわかる。上では動作主は顕在していないが、試みに(85)(87)に特定の動作主を表す語を付加すると許容度が低くなる。

(92)^{??} 金メダルが 太郎によって めざされている。

(93)^{??} 大学合格が 彼らによって めざされている。

(94) ヨーロッパ統合が 人々によって めざされている。

(95) 我が社では 合理化が 社員によって めざされている。

(94)(95)のように不特定多数を表す語が動作主である場合には文は適格である。ただしそこでは「動作を受ける対象に視点をあてる」という典型的な受動の意ではなく、「人々一般」が主体になっている。どちらにせよ、ここで問題にされているのは「動作主の背景化」という現象である。^{注6)} 言い換えれば「めざされている」すなわち「その目標が必要あるいは望ましい」という理解があるということが重要なのであって、

「めざす」という行為の動作主には関心が向けられないのである。

上のように、動詞にレル・ラレル形がついて、格の交代（目標がガ格で表される）が起こるといふ形態的变化に対して「動作主の背景化」という意味づけを行ったのだが、これと同種の現象が「ねらう」では次のように起こる。

(96) このデザインは やせてみえる効果を ねらったものです。

(97) このテープは 英語のセルフ・マスターを ねらったものです。

(96)(97)では「めざす」のような態の転換がなされたわけではないが、やはり誰が考案したかということは重要ではなく、「やせてみえる効果」「英語のセルフ・マスター」という目標に焦点があてられている。「動作主の背景化」の一種といえよう。一方「ねらわれる」といういわゆる受け身形はそういう機能は果たさない。

(98)^x このデザインでは やせてみえる効果が ねらわれています。

(99)^x このテープでは 英語のセルフ・マスターが ねらわれている。

(98)(99)では目標に対する「加害性」が感じられ、それが文を不自然にしている。全体の文意は「加害性」を表さないはずであるのに、「ねらわれる」という語形が「加害性」を持ち込んでいるのである。「ねらわれる」が強く「加害性」と結び付いていることが再確認される。

2.5. 可能態

「ねらう」が目標を表す動詞の中では実質的意味を持つ傾向が強いことを2. 3で指摘した。本節ではそれを可能態化を通して補強したいと思う。

(100) 敵の内情が知れたからには 手薄な所が ねらえるぞ。

(101)[?] この位置からなら 的を ねらえる。

(102) 綾子は この調子で行けば 優勝を ねらえる。

(103) この作品は 入選が ねらえる。

全ての「ねらう」の例文が可能形「ねらえる」に移行できるわけではない。例文によっては適否の定めにくいものもあるが、少なくとも以下のことはいえそうである。(100)のように「加害性」が明確な文は「ねらえる」が自然である。(101)のように「加害性」の低いものはやや不自然になる。これは「ねらう」が単なる目標を示すにとどまらず、「達成」といった実質的意味及び自立性を保っているからであろう。またコトを目標にとる場合「優勝」「入選」などの価値ある事柄を達成する見込みが高いことを意味する。(102)(103)を主題（「綾子」「この作品」など助詞ハに伴われる名詞）と、「ねらう」を含む述部とに分けると述部は主題の「ある事柄を実現する能力・資質を有する」と

いう属性を述べていることになる。この関係が成立しない例は不適格になる。

(104) このダイエットをすれば 減量が ねらえる。

(105) 皆が協力すれば 駅の美化が ねらえる。

一方「めざす」の可能形「めざせる」の例文はどれも不自然である。

(106)[×]道が分かったから 空港を めざせる。

(107)[×]綾子は この調子で行けば 優勝を めざせる。

(108)[×]この作品は 入選が めざせる。

それも「めざす」が「ねらう」と違って「達成」といった実質的意味を持たないことと関係すると考えられる。

2.6. その他の「めざす」の意味特徴

ここでは「めざす」が持つ他の意味的制約について三点述べたい。

まず主体の関与という点に触れる。既に井上1986が指摘しているように「めざす」を用いるには「動作主＝移動物」の関係になくてはならない。主体と移動物が一致しなければ非文になる。

(109) 的を ねらって 引き金を引く。

(110)[×] 的を めざして 引き金を引く。

(111) 敵陣ねらって 突進する。

(112) 敵陣めざして 突進する。

(113) 母は その激励で 太郎が猛勉強して合格することを ねらっている。

(114)^{??} 母は その激励で 太郎が猛勉強して合格することを めざしている。

そしてそれはコトを目標にとる場合にもあてはまる。(114)はコトの実現を目標にしているのだが、主体自身はその実現に直接関わっていないので不適格である。それに対して「ねらう」の方は自らは特に動かず傍観者的にコトの実現を期待することが可能である。

続いて目標の内容に関する制約を二点述べる。

(115)[×] 親を喜ばすことを めざして 肩を叩いた。

(116) 親を喜ばすことを めざして 家業に身を入れた。

(117)[×] 駅の美化を めざして ゴミを いくつか拾った。

(118) 駅の美化を めざして キャンペーンをする。

井上1986は次のように述べている。

「めざして」と共起する動作は、目標に対する「経過的」、場合によっては「段

「階的な」動作である。すなわち「到達までの経過」としての動作である。一略一移動の経過性を強調することは、目標が物理的、心理的にある程度遠くにあること（到達するまでに時間がかかること）を叙述することである。

これは「場所」を移動目標とする「めざす」についての記述であるが、コトを目標にする「めざす」にも同様のことがいえる。「めざす」は実現までに努力が必要であり、時期がかかるコトを目標とする。(115)(117)はこれに反しているのが不自然になる。

もう一点は目標とするコトの社会的評価についてである。

(119) 利益の独占を ねらう。

(120)× 利益の独占を めざす。

(121) 今日は褒められることを ねらって 宿題を念入りにやった。

(122)× 今日は褒められることを めざして 宿題を念入りにやった。

(123) 舞台でうけることを ねらって ギャグをとばす。

(124)× 舞台でうけることを めざして ギャグをとばす。

「めざす」の適格さは目標であるコトの社会的評価に影響される。一般的に考えて価値のあることでないと「めざす」と共起できないのである。この制約は先に述べた「時間や努力を心要とする」という制約と関わっている。価値の認められない事柄に対して時間や努力を費やすことは普通あり得ない。従って二つの制約はより抽象度の高い次元で結び付いているといえよう。

その点「ねらう」はそうした評価に拘らず目標をとることができる。

3. まとめ

分析してきた結果を以下にまとめる。

ねらう 好ましくない影響を及ぼす対象としてある対象を選び出す。ただし「全体の中からある条件を満たす不特定部分を取り出す」ということを表す場合と具体的にどのような行動をとるのが明らかな場合は必ずしも「好ましくない影響」を及ぼすわけではない。

めざす 価値の見出せる地点に辿り着こうとする。時間や努力を費やすという段階を経る。

以上、両語の意味的特徴を示してみたが、決してこれが完全な記述というわけではなくさらに分析を深めることが必要である。この他にも精神的行為（具体性の低い行為）を表す動詞はほとんど、分析されないまま残っている。本稿で試みた手法がどこまで普遍性を持ち得るか、まだ明言できる段階ではないが、精神的行為がどのような具体的

行為を通して実現されるかという観点は大きな鍵になると考えている。また動詞がテ形をとったときの自立性をめぐる問題については他の動詞の分析も含めてより研究を進めなければならないだろう。それらは今後の課題としたい。

注1) たとえば井上1986は目標を表す「めがけて」が非常に自立性の低いものであることを指摘している。

2) 田窪1984は名詞が「場所性」を持つかどうかを判定するテストを幾つか提案している。たとえば「どこ」を用いた疑問文に対する答えの焦点になることができるかどうかといった点である。

3) 「チャンス」を状況の一種として捉えれば「場所性」と「時間性」の両方が共存する語といえるだろう。

4) 次の例は一見「時間名詞」を目標にしているように見える。

8月を めざして 計画を進める。

しかしより厳密には「8月に達成すること」のようにコトとして読み込んでいくといえよう。

5) 「部分化」という概念は田窪1984でも述べられている。

6) 「動作主の背景化」という用語及び概念については益岡1987に依拠している。

／参考文献／

井上優1986「目標の意味論—めがけて・めざして—」『日本語研究第8号』都立大学
国語学研究

工藤浩1982「叙法副詞の意味と機能」—その記述方法を求めて—『国立国語研究所報告集(3)』

田窪正則1984「現代日本語の場所を表す名詞類について」『日本語・日本文化』12号
大阪外国語大学

益岡隆志1987『命題の文法』くろしお出版

(こばやし かなこ・東京都立大学大学院生)